



建築作品紹介

里山の子どもたちの家

「里山の子どもたちの家」コンセプト

敷地は海に向かって緩やかに傾斜する山坂の中腹にある。周囲はかつての新興住宅地である。ここのできる子ども園を山並みに抱かれた子どもたちの里山の家にしようと考えた。

「園舎が園庭を囲む」配置計画、平面計画

新園舎は東南の園庭（既存園舎部分）を囲むL型とし、西側に小さな子どもたち（0歳から2歳児）の保育室と玄関・職員室、北側に大きな子どもたち（3歳から5歳児）の保育室と遊戯室を配置した。L型のヒンジの部分は2階建てとして、1階に給食室、2階に子育て支援室を設けた。

「里山の集落のような佇まい」空間構成、断面構成

保育室は1室ごとに屋根を設けて、里山に民家の家々が建ち並ぶ様にした。北側の大きな子どもたちの家は南北方向の棟をもつ切妻、西側の小さな子どもたちの家は方形の屋根として、園庭に面する下屋がすべての家々をつないでいる。

その下屋は天井高を低く抑え、子どもにふさわしいスケールの空間とした。下屋の下にはそれぞれ1間の幅をもつ廊下と濡れ縁が通り、さらに外

に1間の軒下空間がある。保育室・廊下・縁側・濡れ縁・軒下・園庭と多層のレイヤーが重なり、保育室から園庭までゆるやかにつながる。

「木造とRC造のハイブリッドによる

木材現しの架構」構造計画、内部計画

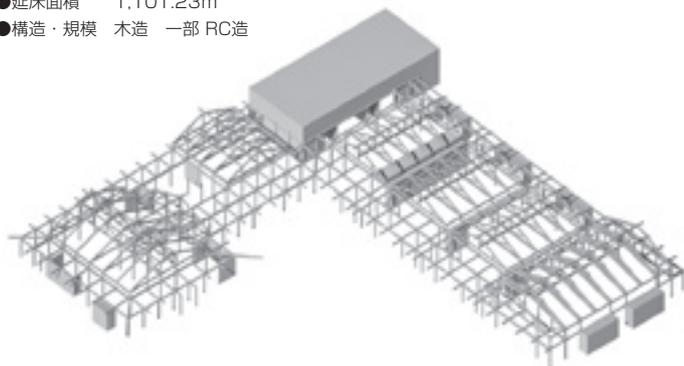
現代の一般的な材料・技術を活用して、かつての里山の民家のような佇まいをつくることにした。

里山の民家のような佇まいを創るために基本構造は木造とし、2階建て部分をRC造とした。このRC造部分を耐震要素としながら、更にRC造の耐震要素を分散して配置することで、園庭に面する下屋部分に筋交いや壁面をなくし、懐かしい様相を目指した。

架構は一般流通材で造ることを前提に、それぞれのスパンに合わせた架構形式を採用した。間口4間の大きな子どもたちの家はキングポストラスとし、間口5間の遊戯室はシザーストラスである。複雑な屋根形状の小さな子どもたちの家は棟付近に2本のキール梁を掛け、そこから軒桁に向かって梁を掛け渡す方式とした。母屋を含む全ての架構を現しとするため、天井仕上材は母屋間に設けた。

■建物概要／日立市立はなやま認定こども園

- 所在地 茨城県日立市金沢町2丁目10番23号
- 設計・監理 三上建築事務所
- 建物用途 認定こども園
- 敷地面積 3,122.19㎡
- 建築面積 1,024.37㎡
- 延床面積 1,101.23㎡
- 構造・規模 木造 一部RC造



構造アクソメ



配置図



断面図

「木造の認定こども園」

本事業は、少子高齢化・人口減少が進行するに伴い、子ども・子育て支援政策、公共施設の適正化政策の一環として、旧はなやま幼稚園と旧金沢保育園を統廃合してはなやま認定こども園を設立するものであった。

日立市では初めてとなる新築の公立認定こども園であることから、その期待は大きいものであり、木造建築の魅力をも十分に活かす施設とし、公共施設の木造化の推進力となることも期待されていた。

子どものための施設であるということ、木造であるということから導き出したのが「里山の子どもたちの家」である。

かつての民家のように母屋と下屋からなり、廊下・濡れ縁・軒下が園庭と保育室を緩やかにつなぐ。このこども園では、子どもたちが緩やかにつながった内外の空間を自由に行き来し、生き生きと過ごしている。コロナ禍の今も、子どもたちの元気な声が地域に響いている。

(三上建築事務所 大井 友彦)

